

1

僕の友人はよく屋上から落ちる。

もうかれこれ二十回にはなるだろうか。授業中——僕は窓際の席なのだが——視界の隅を何かがよぎる。それで窓を開けてのぞいてみると、あいつが落ちている、というわけである。最初のころは大騒ぎになって学校中の人間——生徒教師はじめ事務員警備員さんまでもが校庭に駆けつけた。すると、あいつは地面に大の字で突っ伏しているのだが、傷一つ負っていない。以前柔道をやっていたから無意識に受け身をとってしまったているのだ。その受け身があまりにも見事なものだから、あいつの飛び降りはいつも失敗に終わる。そのうち誰も屋上からの落下物を気に留めなくなった。あ、またやってますね、ってなもんだ。

その日も窓からあいつが落ちてくるのが見えた。英語の時間だ。予習を完璧にしている、授業を聞く必要もなかったから、見るともなしに校庭のほうを眺めていた。すると、雲一つない青空を背景に、あいつが落ちてきたのである。人間の適応能力とは不思議なものだ。はじめて飛び降りがあったとき、僕はそれを人間と認識できなかった。何かおっきなものが見えたような……というひどく頼りない視覚情報

があっただけである。ところが今はどうだろう。落ちてくるのが人だとわかるどころか、服装髪型まではつきり認識できる。それが何の役に立つのかはまだ判明していないが。

めんどくせえなと思いつつながら席を立つ。当然ながらクラスの目が僕に集まる。

「どうした田嶋<sup>たじま</sup>」

と、中年英語教師のかすれた声。「どうした田嶋」ってなんかすごい教師っぽいセリフだなと思う。

「あ、岡崎くんがまたやったみたいなので様子を見に」  
おかざき

「あんまり構いすぎると、あいつも調子に乗るぞ」

「世界があいつを見捨てても僕だけは見捨てないって決めてるんです」

「そうか、友情だな。わかった」

先生の許可が出たところで教室を飛び出して校庭に向かう。校庭にはあいつ以外誰もいなかった。あいつを心配して駆けつけるのなんて僕か秋<sup>あき</sup>くらいのものだ。そして、残念ながら秋のいる教室からは校庭が見えない。

あいつ——岡崎<sup>おかざき</sup>朋久<sup>ともひさ</sup>は砂に汚れた足であぐらをかいていた。口をへの字に曲げて腕を組み、じっと空を見つめている。

「今日の受け身はどうだった？」

「完璧。かすり傷もなかった」

完璧だ、と繰り返して朋久は嘆息する。彼だってもはや飛び降りて自分が死ぬるとは考えていない。しかし、せめて痛みだけは感じたいのだろう。

「そういえば数字のテスト勉強してる？」

まずは雑談から入る。いきなり致命的な質問はなしだ。  
クリティカル

「あんまりやってない」

「大丈夫か？ お前、前も追試だったろう」

「ベクトルは得意分野だ。いける」

「そういうこと言つてると足元すくわれるぞ」

呼吸が落ち着いているのを見てとる。もう本題に入ってもいいだろう。

「で、今日はどうしたんだ。姉さんにエロ本でも見つかったか？」

言いながら隣に腰かける。砂の地面は冷たくてお尻がびつくりする。こんなにびつくりさせてると便秘になりそうだ。

「いや、秋ちゃんのことなんだけど」

秋ちゃん。秋。まいはろ米原秋。僕たちの友人、そして朋久の彼女だ。

「秋がどうしたって？ 二週間でもう倦怠期か？」  
けんたいき

二週間前、彼が告白に成功したことを嬉々として報告してきたことを思い出す。それは僕としても喜ばしいことであつたが、予想外ではなかつた。普段の彼らの様子を見ていれば「ああ、こいつらどつちも好きだな」というのは容易に読みとれるし、それなのに二人はいつま

でも探り探りの関係が続けていて、具体的には「あ、あの、一緒に帰らない？」「え、いいの？」「よくなかったら誘わないよ」「じゃ、その、お願いします」みたいなやりとりをしていて、微笑ましいと同時にどこかしくもあり、なんであんなにわかりやすいのに早く付き合わないんだとかやきもきしていたりしたので、「やつとかよ」という気持ちが強かつた。

交際を始めてからも二人はお互いの距離をつかみかねているようだった。二人とも異性との交際は初めてじゃないだろうになぜこつちも初々しいのか。きつと恋とはいつだつて初々しいものなのだろう。お互いわからないなりに彼らは幸せそうだったし、それを見ている僕だつて幸せだった。しかし、どうやらこゝでなにがしかの問題が発生しているらしい。

「本当にこれでよかったのかなって思うんだよ」

朋久はつぶやくように言つた。

「どういうこと？」

「秋ちゃんに告白して、付き合つて、それでいいのかなつて」

「え、お前、告白して二週間で飽きたのか？」

実際に付き合つてみて「あ、やつば違つたわ」となるケースはよく聞く。そういうことかと問うたら、彼は強く否定した。

「そうじゃないさ。秋ちゃんのこと大好きだし、世界一かわいいと思つてる」

僕の知る限り彼女はそこまで美人ではない。まあ、恋愛なんてそんなものだ。世界中の女性を知ってるわけでもないのに、「世界一」なんて言ってしまうのが、実は「世界」という概念がごくごく狭いものだということを示している。

「じゃあ、なんでこれでもいいのかなんて言い出すんだ。何が不満？」

「不満はないよ。不満なんてあるはずない」

朋久の言うことはまったく要領を得ない。彼の中にある迷いがそうさせているのだろう。

「全然わからんぞ。ちゃんと説明してくれ」

「あ、さ、恋って基本的に自分の問題だよな」

「自分の問題？」

「そう。相手のことを好きになって、めちゃくちゃかわいいな、手つなぎたいなどか思って、休日は何してるんだろうとか家族はどんな人なんだろうとか考えて、付き合ってるのを想像してにたついたり、うつかり相手の裸を想像しちゃっていかんいかんとあわてて打ち消してそういう自分が嫌になったり、でも相手の顔を見るとやっぱりうれしくなったり」

秋の裸を想像している朋久とか想像したくないな。

「まあ、そういうこともあるよな」

「それってさ、全部自分の心の中の話だろ？ 俺の心の中で勝手に繰り広げられてることだろ？ それは相手には全然関係ないことなん

だ。俺が勝手に好きになって、勝手にいろいろ盛り上がってるだけ。相手を好きだって気持ちちは自分のもので、自分だけの問題だ。その相手の問題じゃない」

「そういえばそうだな」

「でも、告白したら、相手に気持ちを伝えちゃったら、そうはいかないだろ？ もうそれは俺の心の中だけの話じゃない。本当は自分だけの問題のはずなのに、それを相手に背負わせて、こっちが勝手に好きになだけなのに相手はそういうの背負わなきゃいけないくて、俺にはそうやって背負わせちゃった責任があつて、いや責任とも違うな、ううん、ああ、うまく言えないけど、とにかくそれでいいのになんて」

言いたいことはわかった。ようするに恋愛なんて全部自分のエゴなんじゃないかってことだ。本来なら自分の中だけで完結させなきゃいけないものを相手に押しつけることになるのじゃないかと心配してるのだ。ただ好きでいるだけなら相手は要らない。テレビの中の女優だって、マンガの美少女だって、なんだったら消しゴムだっていい。でも、好きって気持ちを相手に伝えて、一緒にいるのならそうはいかない。相手には相手の人格ってものがある。そのことをちゃんと自分は考えてるのだろうか、ちゃんと考えてるとか言っても結局は自己満足に過ぎないんじゃないだろうか、とそういうことだろう。

「変にまじめだよなあ、お前は。誠実っていうか、誠実ぶろうとしてるっていうか」

そう、朋久は誰に対しても誠実であろうとする。自分が不実を犯すことを極端に恐れている。根本的に自分に自信がないのだ。自分のしている行動の正しさを確信できない。自分自身の思いやりや誠実の正しさを確信できない。だから悩む。悩んで飛び降りをして、受け身をとる。

こういうところが彼の好感が持てるところであり、相談される友人としてはうつつとうしいところでもあるのだが。人を傷つけるのに無自覚なよりはずっといい。

彼の肩をつかんでこちらを向かせる。

「いいか、朋久。秋はお前に惚れてる。これはもう絶対の事実だ」

「うん」

「だから、背負わせていいんだよ。お前だって秋の問題背負うわけだし。お互いに相手の問題背負って背負わせて。でなきゃ付き合う意味なんてないだろ」

「でも」

「だいたい問題背負うとかいちいち深刻に考えすぎだ。街を歩いている高校生カッパルがそんなこと考えるもんか。秋に重いつて思われるぞ。気をつける」

朋久がうなずくのに躊躇ちゅうちよしていると、終業のベルが鳴った。英語で宿題が出たか誰かに聞いておかないと。

「さあ、戻ろう。早くしないとサッカー部が来る」

僕がうなずくと、朋久は大儀そうに立ち上がって、尻の砂をはらう。

「今日はありがとう」

「あと、彼女いないやつにこういう悩み言うな。嫌味にしか聞こえん」「ごめん」

教室に戻る途中、携帯電話が着信を告げた。画面に「米原秋」の文字が表示されている。ちょうど前方にお手洗いがあつたので、中に入る。

「もしもし」

「もしもし、源ちゃん？」

電話越しでもわかる少しハスキーな声は不思議と人を安心させる響きがある。

「ちよつと今から二組に来てくれる？ 手伝ってほしいことがあつて」

「わかった」

二つ返事で通話を終える。詳しく話を聞く必要もないだろう。秋が僕に頼むことなんてろくでもないことに決まっているのだ。

ついでだからトイレで用を足してから二組の教室に行く。黒板の前で秋が腕を組んで待っていた。肩に少しかかるくらい黒髪、顔の輪郭は丸っこく、太い眉が意志の強さを象徴している。足はパンチラなど恐るるに足らずとばかりに開かれている。かわいいセーラー服を着ているというのに、たたずまいは格闘技のチャンピオンだ。驚くべき

はこれが単に人を待っている姿ということである。デートの待ち合わせもこうなのだろうか。

「で、どうしたんだ？」

近くの机に尻の半分を乗せる。地面ほどではないが、やはりひんやりする。

「ちよつと待ってね。もう一人来るから」

「もう一人、ねえ」

「待ってる間に話したいんだけど、あのさ」

朋久の話をするつもりだ、と思った。声にわずかな照れの感情が混じっていたからだ。

「岡崎くんのことなんだけど」

「やっぱり。こんなとき、彼女との付き合いの長さを実感する。」

「朋久がどうした？ うまくいってないのか」

「全然そんなことないよ。毎日一緒に学校来て、一緒に帰ってるし。この前は映画観に行ったし」

「のろけ話か。だったら帰る」

「違う違う。あの私ね、岡崎くんのこと好きなの」

何を言ってるんだ、こいつは。

彼女が朋久を恋慕<sup>れんぼ</sup>していることなど、公然の事実だ。今さらそんな恥じらいの表情を浮かべて宣言するようなことはない。

「岡崎くんが本当に好きで、だから毎日『大好き』って言って

るの」

「けっこうなことだな」

『大好き』と言われるたびに顔を赤らめる朋久の姿が浮かぶ。

「でも、毎日言ってるのに全然たりないんだ。私の好きって気持ち、全然伝えられてない」

「そんなことないんじゃないか。あいつだってお前の気持ちわかってるよ」

「そういうことじゃないんだよ。毎日好きだって言っても好きだって気持ちがあふれ湧いてきてあふれそうなの。もう今にも破裂しそうで。いくら好きだって繰り返してもそれってただの言葉で、この胸が張り裂けそうな感じとかドキドキとかそういうの全然表現できてなくて」

「やっぱりのろけか」

「違う！ 真剣に悩んでるの！ 私が岡崎くんに伝えたいのはね、この気持ちなんだよ。今ここにある、たしかに感じてる気持ちそのものなんだよ。でも、それってどうやったら伝わるのか全然わからなくて」

「なんというか、なんというか。」

朋久のほうも問題はあがあるが、こっちはこっちで問題だ。きつと彼女はまた恋との付き合いに慣れていないのだ。自分の中から抑えても抑えてもあふれ出てくる感情、その飼いならし方を心得ていない。この熱量で迫られたら朋久のほうも不安になるつものだよなあ。

そういう気持ちは一過性のものだから、と言ってもおそらく秋は納得しない。彼女は未来の話をしているのではない。今この瞬間の話をしているのだ。

「ねえ、どうすればいいかな？」

「うん、愛をたしかめる方法としては古来より互いの性器同士を――」

「サイテイ！」

お腹を蹴られた。バランスを崩して机も一緒に転倒する。ここで拳でなく蹴りを選択するところが、容赦ない。

「ごめん。ついカッとなっちゃって」

そうやって弱気な顔を急に見せられると、こちらも許してやろうかという気になってしまう。

「心配ない。僕が悪かったよ」

痛みを耐えて倒れた机を元に戻す。と、教室後方のドアにセーラー服が見えた。

「お待たせしました」

と、教室に入ってくるその子は、端的に言っただけだった。髪は男子と見紛うほど短く、それでもそのかわいさをいささかも減じてはいない。短髪が似合う女子は本物だ。いったい何の本物なのかは知らないが。

その子が秋の隣にいくと、余計にかわいさが引き立つように感じた。「この子は四組の小川幸ちゃんです。こっちは六組の田嶋源ちゃん」

紹介するときにちゃん付けはやめろと言っているのだが。彼女に言わせれば「だって源ちゃんは『ちゃん』まで入れないと源ちゃんじゃないじゃん」だそう。しかし、この子は小川さんというのか。慎重しやかでいい名前である。お互いに「よろしく」とあいさつを交わす。机を三つ適当に動かして円形に配置して座る。時計回りに僕、秋、小川さんの順だ。

「で、この集まりは何なの？」

「私が秋ちゃんに相談したんです」

小川さんが申し訳なさそうに言う。

「それがけっこうやっかいな問題で。だから源ちゃんに協力してもらおうと思って」

一方秋はまったく悪びれた様子がない。僕にやっかいな問題を持つてくるのはこいつの得意技である。

「なるほどね。で、その相談内容というの？」

「はい、あの、日本史の服部先生はっとりって知ってますか？」

「さっちゃん、タメ口でいいよ」

余計なことを言うな、秋。小川さんが言い直す。

「えっと、服部先生知ってる？」

あ、でもこのぎこちないタメ口かわいかもしれない。

「知らないな。僕、世界史だから」

「こういう人なんだけど」

小川さんは一枚の写真を机に出す。それは何かの新聞記事から切り取ったようで、白黒の。ヘアヘアだった。メガネをかけた蓬髪ほうはつの男性のバストアップが写っている。絶妙に地味な顔だ、と思った。なんだか顔から伝わってくる自己主張というものが極端に薄い。いくらこの顔を目に焼き付けようとしてみても、ちゃんとインクをつけなかったハシコみたいに薄れてしまう、そんな気がする。

「で、この服部先生がどうしたの？」

「ある日、いつものように日本史の授業があつたの。でも、来たのは服部先生じゃなかった」

「休みだったの？」

「ううん、そうじゃない。服部先生は休んでなかった。教室に来て授業をしてつた」

「待てよ、来なかったんじゃないの？」

「そう来なかった」

「いや、でも今来たつて」

「服部先生は来た。でも、その服部先生は服部先生じゃなかったの、」  
「よく言つてることがわからない」

小川さん少し頭がおかしいのだろうか。そして、手に負えなくなくて秋は僕に小川さんを押しつけてきたのか。そんな風に思っていると小川さんがもう一枚写真を出してきた。

今度はカラーの写真で男の横顔が写っている。アングルからして盗

撮かもしれない。今度の男もメガネをかけているが、あごが突き出ているのが見てとれる。

「これ、服部先生に見える？」

小川さんが変なことを聞く。

「まさか。全然似ても似つかないじゃないか」

アングルが違うとはいえ、同一人物の顔がここまで異なるはずがない。

「そう思うよね。でも、あの日、教室に来たのはこの似ても似つかない男だったの。そして、服部先生を名乗つて、平然と授業をしてつたの」

「で、その教師のふりしたあご男はつかまつたのか？」

「ううん、つかまらなかった。それどころかみんな服部先生が入れ替わつてゐるのに気づかなかつた！」

「そんなバカな！」

「本当なの。授業が終わつてからまわりに聞いたの。『服部先生、いつもと違うくない？』つて。でもみんな『そうかなあ』とか『言われてみれば違うかも』とかすごいあいまいで」

二つの写真を見比べる。写っている顔は共通点を探せというほうが難しい。この違いに気づかないなんて馬鹿げている。

そうか！ 僕の頭を電流が駆け抜けた。

本物の服部教諭はすこぶる存在感の薄い顔をしていた。だから、誰

も彼の顔など覚えていなかったのだ。ゆえに別人が授業に来てもまったく何の違和感も抱くことがなかった。通常ならありえない話だが、服部教諭のこの顔ならそういうことがあっても少しもおかしくない。「で、その後服部先生は戻ってきたのか？」

小川さんは悲しげに首を横に振る。

「あの日からずっと本物の服部先生は見えない。授業に来るのはにせもので、職員室でもあのにせものが他の先生と楽しそうに話してた」同僚たちでさだまされてしまうのか。どれだけ存在感なかったんだ、服部。

「私、どうしても本物の服部先生がどうなったのか気になって。それでにせものを問い詰めたんです。でも、自分は本物の服部だの一点張りでもうにもならなくて」

「それで秋に相談したんだな」

ようやく話がつかめてきた。

今まで口を出さなかった秋が言う。

「源ちゃん、私は本物の服部先生を探したいと思ってる。手伝ってくれる？」

「もちろん。協力する」

かわいい女の子のためなら努力は惜しまないのが僕の主義である。

「ありがとう」

小川さんの瞳は少しうるんでいるように見える。ここまで生徒に慕

つてもらえるとは、服部先生は教師冥利に尽きることだろう。みょうり

「源ちゃん、まずはどうしようか」

「そんなの決まってるだろ」

まっさきに思いつく手段は一つだ。

「どうにか口割らせてみるしかないんじゃない？　そのにせあご服部野郎にさ」

## 2

職員室の扉が開く。息を止めて身構える。出てきた人物のあごをチエックする。突き出ていない。ハズレ。

「国語の大森先生だね」

秋が出てきた人物の素性を教えてくれる。僕たち二人は職員室前の黒板で明日の時間割変更を確認しているふりをしている。部屋から例のにせ服部が出てくるのを待っているのだ。今の時刻は五時三十分。教師の勤務時間は五時までだからそれ以降は残業ということになる。先刻からこうして待ち構えているのだが、一向に帰宅する気配がない。

「お前ら、どうしたんだ？」

背後で声がして肩が震えた。振り返ると今出てきた教師——大森先生と言ったか——が怪訝けげんそうな様子で立っている。

「黒板見てただけです、先生」

秋が用意していた言い訳をする。



「でも、さっきもいなかったか、お前ら」

痛いところをつかれた。どうやらさっきも僕たちの姿を目撃されていたらしい。通常、三十分以上黒板を眺めている人間などいない。

「あ、たまたまこの田嶋くんと会って、話しこんでたんです」

うまい切り抜け方だ。心の中で秋に拍手を送る。

「そっか、そういうことか」

大森教諭も得心がいったようで、自分の頭をなでながらうかを歩き去っていく。

「危なかったな」

「こんなのピンチのうちにも入らないよ」

頼もしい限りである。わかりやすい強さだけでなく、こういうしたたかさをあわせもっているのが秋の怖いところだ。

それからさらに三十分待つ。そろそろ帰りたいな、なんて思いながらあくびをしていると、扉が開く音がした。室内とろうかの境界線に黒い皮靴が現れる。視線を上方に移し、そのあごに意識を集中させる。

あごが出ている。

「あいつに間違いないね」

秋が手元の写真と見比べる。にせ服部は僕たちのほうには来ないで、向かい側のろうかを歩いていく。気取られないよう十分な距離をとってから尾行を開始する。

「あれがにせあご服部大先生か」

「あの、あんまりあごとか言うのやめない？ 本人気にしてるかもしれないし」

「それもそうか」

たしかに相手の身体的特徴をあげつらうのは大人げなかったかもしれない。これからは彼のあごに対する言及はなしにする。

にせ服部は存外背の高い男だった。といっても胴長のためスタイルはあまりよくない。猫背で、やや右足に重心を傾けるような歩き方をしている。校舎から出ると、駐車場には向かわずに門を通っていく。どうやら徒歩かバス、あるいは電車通勤らしい。こちらにしてみれば好都合である。気づかれないように、かつ離されないように注意しながら人通りが少ない場所に来るのを待つ。

月がにわかにはその輝きを増してきたころ、彼が裏道に入った。ここらへんは民家も少ないから誰かにやりとりを聞かれる心配もない。僕たちは駆け足で彼に近づいていった。足音に気づいたのか、にせ服部がこちらを振り向く。

「きみたち……うちの生徒？」

「はい、二年六組の田嶋です」

「二年二組の米原です」

とりあえずは無難に頭を下げて自己紹介する。最初から事をあらだてる必要はない。

「きみたち、こんなとこまでついてきてどうしたんだ」

まるで教師みたいな声色で言う。この男自身は教員免許を持つているのだろうか。持つていようが、正式な教員でないことは確実である。

「あなたは服部先生ですよね？」

「ああ、服部だが」

「実はあなたが別人に入れ替わっているっていうわさがありましてね」

上目づかいに顔色をうかがう。

「本当なんですか？」

「入れ替わってるってどういうことだい？」

「あなたは本物の服部先生じゃないってことです」

まるで表情が変わらないどころかびくりともしない。心の中で舌打ちをする。

「そんなわけないだろう。私は正真正銘本物の服部だ」

「うそつかないでください」

秋が眉間にしわを寄せて言う。さつそく苛立ちがたまっているようだ。注意しないと。

「あなたが服部先生であるはずがない」

「何でそう言える？」

「友達がにせものだって言っていました。私は彼女を信じます」

「では本物の私はどんなやつなんだ？」

そう言われると返答に窮するしかない。本物の服部先生を写真で

しか見たことがないからだ。しかもその写真の顔も影が薄くてつい忘却しうになつてしまふ。つまり僕たちには「お前はにせものだ！」と強く主張できるような実感が薄い。

「妙な言いがかりをつけなくてもええかな。私だって疲れてるんだ」にせ服部はそうして先に進もうとする。次の瞬間、ドン！という凄絶な音がする。見れば秋が壁に手を付けて、にせ服部を追いつめていた。

あ、爆発したか。

「おいおいおいおい！ 黙って聞いてりや何だ貴様！」

黙ってなかつたら、お前。

「妙な言いがかり？ 言いがかりじゃねえよ、にせ教師！」

あんなに威勢のよかつたにせ服部は女子高生の啖呵にすっかり委縮してしまっている。大人がおびえている姿というのはもの悲しい。

「本物の服部はどこだ？ 貴様は知ってるはずだよな、あご野郎！」

あごに触れないようにと言ったのはどこのどなたさんでしたっけ。

「お前みたいなあごは本物の居場所教えるくらいしか存在価値ねえんだよ！」

ちよつとそれは言いすぎではないだろうか。キレた秋をとめるのは不可能事だ。許せにせ服部。

しかし、にせ服部、おびえながらもなかなか口を割らない。意外に芯の通った男なのかもしれない。ならば恐喝は必ずしも最善の手段に

はならない。

彼の足元にバッグが落ちているのに気づく。壁に追いつめられたと  
きに落としたのだろう。秋がドスをきかせている間にそれを拾って中  
をあらためる。目的のものはすぐに見つかった。

「服部先生」

あえてその名で彼を呼ぶと、僕はバッグからとった携帯電話を見せ  
た。

「申し訳ないですけど、勝手に中身見させていただきました。なんか  
電話帳に『服部さん』ってあるんですけど」

「おい、どういうことだコラ！」

秋はますますヒートアップする。

「お前が服部なら、なんでお前の携帯の電話帳に服部なんて名前があ  
るんだよ！ やっぱりにせものじゃねえか！」

「す、すみません」

消え入りそうな声で言う。まだ言い逃れは十分に可能はずだが、  
彼女に凄まじく冷静でいられるはずもない。むしろよくここまで  
耐えたものだ。

にせものは秋に任せて彼らに背を向け、「服部さん」の番号にかけ  
てみる。呼び出し音が数回鳴り、男の音がする。

『もしもし』

「もしもし、服部先生ですね」

相手が緊張するのが電話越しにわかる。こいつがああ服部に違いな  
い。そう思っただけで写真の顔と今の声を重ねあわせようとする。

あれ？

『きみは？』

おかしい。ついさっき写真を見たはずなのに顔が思い出せない。そ  
の輪郭すらもまったく思い描けない。

『おい、聞いている？ きみは？』

「あ、はい」

記憶力には自信がある。服部の異常な影の薄さを認識しながらも、  
自分だけは覚えていられるかもしれないという期待があった。しかし、  
どうやら甘い考えだったらしい。

「二年六組の田嶋と申します。以後お見知りおきを」

『何の要件だ？』

「あなたを探している生徒がいます。小川という子です」

『知らないな』

とぼけているようには聞こえなかった。本当に知らないらしい。ま  
あ、生徒の名前などいちいち覚えてられないのだろう。

「なぜいなくなったんですか？ 小川はあなたのことをとても心配  
していますよ」

『俺を心配？ へえ。そんなことってあるんだ』

服部は日本でパンダが発見されたニュースでも聞いたような声を

出す。

『いや、俺、昔から影薄くてさ。授業中に当てられたこととか一回もないんだよね。親からも忘れられる始末だし。そんな俺を心配ねえ。へえ』

「質問に答えていません。なぜいなくなったんですか？」

『ああ、なんとなく仕事辞めて遊びたくなって。まあ、入れ替わってはどうせ気づかれないし』

ひどく適当な理由だった。そんなことで社会人が職務を投げ出してもいいのか。

「とにかく一度小川さんに会ってもらえますか？ 本当に心配してるんです」

『めんどいなあ。俺、自由でいたいんだよ。心配されるとかそういうのは勘弁してほしい』

僕が話しているのは本当に大の大人なのだろうか。その声色はわがままを言う子供そのものである。

「でも、ですわね——」

「きやあああああ！」

背中で秋の悲鳴が聞こえる。気づかぬうちに彼女を複数人の男たちが取り囲んでいる。少し遠くに走って逃げるにせ服部の姿が見えた。

「これは……」

『ああ、俺の友達が来たみたいだね。一応そのあこの人には俺の代わ

りやつてもらってるし、助けないと思うって』

友達？ あのやくざみたいな風貌のやつらがか？ とういかやく

ざそのものじゃないか。状況を把握しようとしているうちに僕もやつらに取り囲まれる。どうする？ 考えている間にも男たちはにじり寄ってくる。逃げ場はなかった。

「源ちゃん、戦える？」

「ああ」

秋が近づいてくる一人を殴って、開戦ののろしを上げた。男たちが獣の叫びをあげる。携帯を投げ捨てて迎え撃つ。この人数とまともにやりあう気はない。うまく攻撃を避けて同士討ちを狙う。一方、秋のほうはそんな計算はしない。正面から攻撃を受けて正面から殴り返す。すぐに鼻から流血する。帰ったら親は心配しないのだろうか。

「ちよつと待った！」

上のほうからそんな声が聞こえてきた。殴りあっていたやつらが敵も味方もなく顔を上げる。

「どこだ？」「どこだ？」「どこだ？」

みんなが一丸となって声の主を探す。その場にいる全員が一つになっていた。

「あそこだ！」

誰かが上を指さす。声の主は四階建くらいの建物の屋上に立っていた。

「岡崎くん！」

秋が黄色い声を出す。それは他でもない朋久だった。

「俺も加勢するよ！」

彼は屋上から飛び降りて、見事な受け身をとる。いつ見てもきれいな着地だ。やくざたちはぼかんとしている。世界にこんな受け身をとる人間がいるなんて想像もしていなかったのだろう。

朋久がいれば百人力だ。もう負ける気がしない。氣勢をそがれているやくざたちに向かって一氣にたたみかける。僕は殴る、秋は蹴る、朋久は受け身をとる。男たちは何もできぬまま倒れていく。僕は裏拳を食らわす、秋は上段回し蹴りをぶつける、朋久は受け身をとる。何人かが逃げようとする。そうはさせるか。僕は飛びかかる、秋はバク宙から旋風脚を繰り出す、朋久は受け身をとる。

やがて男たちはちりちりになって逃げてしまった。

「助かったよ」

受け身をとったままの朋久に駆け寄る。

「でも、何でここにいるんだ？」

「あ、いや、たまたま通りかかって」

何かをぐまかすように早口で言いながら起き上がる。

「それよりどうなってるんだよ。説明してくれ」

僕と秋はこれまでのいきさつを話す。朋久はいぶかしげな顔をしながらかも頷いて聞く。

「本当にそんなふざけた教師がいるのかよ」

「残念ながら事実なんだ」

今まで教師とは理想を持った人種だと思っていた。僕たちを立派な大人にするために懸命になって働いてくれている人格者だと思いこんでいた。しかし、そんなのは僕たちの勝手な幻想にすぎなかったのだ。幻想が破れさった今、言葉は何もない。重い沈黙が僕たちを包む。それを破ったのは秋だった。

「ま、今日のところは帰ろう。みんなよくがんばったよ」

秋の笑顔はいつだって周囲を救っている。彼女はそのことをよく自覚していて、だから笑みを絶やさない。自分が誰かを救えるということとを彼女は知っている。

「あ、でも、その前にちょっと待ってね」

そう言うと、秋は何やら電話をかけ始めた。僕たちに聞かれないように声を潜めている。

「誰と話してるんだろ」

「さあな」

朋久の問いに僕は肩をすくめて答える。秋の考えなんてわからない。秋が電話を切ると、大量の足音が聞こえてきた。やがて大通りから大群の人たちがこちらに向けて行進してくる。

「なんじゃありや」

「私の友達」



源と一緒にいると嫉妬したりするし。いや、二人がそういうんじゃないのはわかってるんだけど、そういうのとはまた別で。なんかモヤモヤしたりして」

もしかしてそれで僕と秋をつけていたのだろうか。

「秋ちゃんがいともと違うことすると不安になって。いつまでも変わらないままでいてほしいとか思ってた。それってすごい自分勝手で、わがままで。だから、俺、全然自分のことしか考えてないやつで」

いつでも朋久は誠実を求める。自分の汚さを隠すことが許せない。その気持ちはある程度理解できる。度を越した愛情を与えられることは罪悪感を生む。

でも、それは。

「好きだって言ってるじゃん」

秋が陰しい顔をして、声を絞り出すように言う。

「好きだって言ってるじゃん」

「でも、俺は」

「そういうの全部ひっくるめて好きだって言ってるじゃん！ どうしたらわかってくれるの!？」

秋は僕たちに背を向けて走り出してしまふ。百人のお友達は所在なげに立っている。朋久はまた固まっていた。

「おい、秋!」

仕方がないので一人で彼女を追う。追いつくと、彼女はコンビ二前

の縁石に座りこんでいる。

「大丈夫か」

「大丈夫、だよ」

「そんな大丈夫じゃなさそうな声で大丈夫だって言うな」

「明らかに大丈夫っぽくない人に大丈夫かなって聞かないで」

「悪い」

「こつちこそごめん」

そんなやり取りをしたら彼女の顔からふっと笑みがこぼれる。

「何傷ついてるんだろうね、私」

「そりゃ生きてりゃそんなこともあるんじゃないか」

「ダメだよ、傷つけられたとか思っちゃ。傷つけられたんじゃないくて私が勝手に傷ついただけだもん。自分が傷つくの、岡崎くんのせいにしちゃダメだよ」

「いや、これはあいつも悪いと思うが」

今になっても追いかけてこないのはちよつとひどいと思う。

「ま、あいつも真剣なんだよ、お前のこと。だからいろいろ悩む」

「わかってる。岡崎くん、私のこと好きだもん」

縁石から腰を上げて僕に向かい合う。

「聞いてもらっていい？ 私の決意」

「十秒以内でな」

「私、もう岡崎くんのことで傷ついたりしない。自分の気持ちを岡崎

くんのせいにしたりしない」

「八秒だな」

こいつは強い、と思う。とても強くて、でも案外もろいかと見せかけて、やっぱり圧倒的に強い。

「じゃあ、戻ろうか。お前の恋人と百人の友達が待つてる」

彼らも相当困り果てているだろう。可及的速やかに戻ってやらねばならない。

「うん、戻ろう」

二人で元来た道を歩き出す。月が煌々と光っている。

### 3

それから僕たちは服部教諭について調べた。雇い主である校長に話を聞いて、彼が住んでいたアパート近隣の人にも聞きこみをする。しかし、彼らはほとんど服部のことを覚えていなかった。どうにか親族にまでたどり着いたが、その親族にしたってろくに服部のことを知らない。

「いや、そういえばそんなやつもいた……ような気もしてくるかなあ」  
これは服部の生物学上、そして戸籍上の父の言葉である。さすがに面喰った僕は手に入れた情報を疑ったが、たしかに彼は服部を成人まで育てた親だった。

僕たちは服部の影の薄さをなめていたのかもしれない。彼はほとん

ど自分の痕跡を残さずに生きている。さながら透明人間のようだ。居場所を見つけ出すなんてとてもじゃないが不可能に近い。

「服部は生きてて楽しいのかな」

そう言ったのは秋である。

「だって誰からも気にされないし、覚えてもらえないわけでしょ。そんな人生楽しいのかな」

「さあな。まあ、それはそれで楽しみがあるんじゃないか」

僕にはそんな韜晦しかできない。あれほど影の薄い人生など想像が及ばない。ただ、あれはある意味、人間の理想の一つなんじゃないかと思う。

誰にも関わらずに生きていけたら。

それは誰しも一度は考えたことのあることなんじゃないだろうか。人と関わるのは楽しいこともあるけど、同時に煩わしくもある。自分を取り巻く人間関係から解放されたい。そう願う人は決して少なくないはずだ。

調査を続けて三週間たったある日の放課後、教室で帰り支度をしていると、クラスメイトの一人が息を切らせて走ってきた。

「どうしたんだ、そんなに急いで」

「大変なんだよ！」

その必死の形相に、何かただならぬ事態が起こっていることを感じとる。



「何があっただ」

「四組の小川が、日本史の先生を人質にして体育館に立てこもった！」「なんだって！」

小川さんが日本史教師を人質にした。それはもちろんあのにせ服部のことだろう。なぜ？ 僕たちがいつまでも服部を見つけられないから強硬手段に出た？ とにかく現場に直行しなければならない。クラスメイトとともに体育館に走る。

体育館の入り口付近にはもう人だかりができていた。多くは生徒だが、中には困り果てた顔の教師もいる。朋久と秋もすでにきていた。

「状況はどうなっている？ 犯人は本当に小川さんなの？」

「ああ、何人も目撃者がいる」

朋久が答える。

「小川さんはどういうつもりなの？」

「こういうことみたい」

秋が携帯電話を見せる。どうやら動画サイトを開いているらしい。

再生画面には見覚えのある体育館内部が映っている。

「これって……」

画面右端から小川さんが出てくる。

はばしちやう

『幅城町はばしちやうのみなさん、こんにちは』

カメラ目線で小川さんは朗々と言う。

『今、体育館で人質とつてます。三時間したら殺そうと思います。人

質を助けたかったらこの男性を見つけてください』

服部の白黒写真が大写しになる。そういえばこんな顔をしていたのだったか。いつ見ても影が薄い。

『服部さんという方です。すごい印象に残りづらい顔で大変でしょうが、この動画を何回もリピートしながら街の中を探してみてください。でない人質死にます。応援してますから』

彼女のとびきりの笑顔で動画は終わる。こんな無茶苦茶だ。

「小川さんも何を考えているんだ。こんなことしたって服部が見つかるわけ……」

「おい、写真の男見つけたぞ！」

誰かが言った。

「みなしごビルで似たやつを見たんだ！」

「見つかるのかよ」

僕たちの三週間の苦労は何だったのか。人生の理不尽さを痛感する。

「岡崎くんと源ちゃんみなしごはビルに行つて」

秋が提案する。

「お前はどするんだ？」

「ちよつと人質になつてくる」

思わず耳を疑う。人質になる？

「何でお前が人質にならなきゃいけないんだ。関係ないだろ」

「さっちゃん今何しでかすかわからない。私がついていたほうがいい

と思う」

秋の言うことはもっともだった。たしかに彼女がついていれば小川さんが思い余って重大なことをしてしまうのは避けられるだろう。

「だから、二人は絶対に服部つかまえてきて」

覚悟がまつすぐに射抜くような瞳から伝わってくる。ならば、僕も覚悟で応えなくてはいけない。

「わかった。行こう、朋久」

「ああ。秋ちゃん、危ないことはするなよ」

「わかってる。そつちも気をつけてね」

人ごみをかきわけて学校を出る。服部が目撃されたというみなしごビルは学校から北に一キロのところにある。急がなければ服部は他の場所に行ってしまうかもしれない。それがわかっているからどちらともなく走り出す。

「あれじゃない？」

途中で朋久が上方を指さした。みなしごビルの屋上だ。人が一人立っているのが確認できる。

「よし、行ってみよう」

ギアを上げて走駆<sup>そっく</sup>する。ビルの中に突入、エレベーターを探すが見当たらない。階段しか通路がないようである。段差が広く、段数が多いためなかなか進まない。一段一段が僕たちの体力を着実に奪っていく。ぜえぜえぜえ。このビルはたしか三十階建てだ。ぜえぜえぜえ。

ぜえ。僕の息切れと朋久の息切れが重なって交響曲を奏でる。ぜえぜえぜえぜえ。

屋上に着いたころにはもう虫の息だった。扉を開けた瞬間、二人同時に倒れこむ。

「大丈夫か」

屋上にいた人がハンカチを差し出してくれた。

「ありがとうございます！」

感謝して受け取ろうとする。どちらがそのハンカチを使うのか、朋久と争いになった。結局僕が譲る形になる。使えなかったが今一度その人に感謝を述べる。

「ありがとうございます。あなたは？」

「服部です」

「服部さん。ってあの服部か？」

よく見ればたしかに服部教諭である。まったく気づかなかった。あらためて彼の影の薄さがいかに恐ろしいか思い知る。

「初めましてですね、服部先生。以前お電話差し上げた田嶋です」

「ああ、あのときの。俺に何の用？」

座ったままではかつこうがつかないので立ち上がる。朋久もあわてて立つ。

「今、あなたの影武者が人質にとられてる。あなたが行かないとあの、殺されるかもしれない。だから一緒に来てください」

「嫌だ」

にべもなく断られる。

「電話でも言ったよね？ 俺は自由でいたい。誰にも縛られないで生きていきたい。誰が死のうが関係ないよ」

ひょうひょうとした様子である。これが仮にも教育に携わる人間なんだろうか。

「ぶざけるな！」

そう言おうと思った。しかし、俺が口にする前にそれは別の人間から発せられていた。

朋久である。

「関係ないわけないだろ。小川さんはあんたに会いたくてこんな事件起こしてるんだぞ」

ひどい剣幕だ。ここまで怒っている彼を僕は見たことがない。

「関係ないよ」

なおも平気な様子で服部はうそぶく。

「俺が誰かに関係してたことなんて今まで一度たりともない」

「いや、ある！ 少なくとも小川さんはあんたを慕ってる。あんたが教師やめてどこかに行くのは自由だ。あんたの人生だしな。でも、先生なら自分の教えた生徒にさよならくらい言え！ あいさつはちゃんとしなさいって習わなかったのか？」

額に青筋をうき立たせて服部につかみかかる。

「何をする？ 離せ！」

「離さない！ 今まで誰にも気にかけれなかったあんたには想像つかないのかもしれないけど！ 人間生きてるだけで誰かに影響与えて誰かに影響与えられてんの！ いい大人なんだからそういう自覚くらいちゃんと持てよ！ 自分が誰かに関係してるって自覚！ 当たり前のことだぞ！」

朋久が話していた悩みを思い出す。

自分の問題を相手に背負わせてしまっているのか。

自分が相手に影響を与えているという自覚。自分が相手を傷つけてしまうかもしれない可能性への配慮。自分が誰かの人生を動かすかもしれないという想像力。

服部にそれが欠けているのを、彼は怒っている。しかし、その怒りはたぶん服部には伝わらない。僕たちとはまるで違う世界を生きてきたこの男には。

「離せ！ 離せ！ 警察呼ぶ！」

「呼びたきや呼べ！ あんたがついてくるっていうまで離さないからな！」

服部は必死で抵抗する。二人は激しくもみ合う。助けに入ろうとした。

そのとき。

朋久の体が宙に投げ出された。柵を飛び越え、その姿が見えなくな

る。

えっ。

えっ。

もしかして落ちた……？

考える前に体が動き出していた。全速力で階段を下りていく。

おい、嘘だろ！このビル三十階だぞ！三十階の屋上から落ちたんだぞ！いくらあいつの受け身だつてそんなの無理だ！あいつが死ぬ？あいつが死ぬ？あいつが死ぬ！そんなのなしだろ！だつてこれ服部先生入れ替わり事件だぜ？影の薄い教師が周りにばれずに教師やめてバカンスしようつてそういう話だぜ？全然人が死ぬような話じゃねえだろ！こんなくだらないことで人命が失われていいはずねえ！お前だつてこんなくだらないことで死にたかないだろ！死んじやだめだよ！死ぬならもつと殺人とかテロとか深刻なことで死ぬ！そうしたら泣いてやる！泣き叫んでやる！こんなんじや泣けねえよ！なあ、僕ら友達だよなあ？友達なんだよなあ？だつたら泣かせてくれよ！お前が死ぬときくらい泣かせてくれよ！僕、好きなんだよお前のこと！バカみたいに好きなんだ！死ぬなんて許さない！許さないかな！

ようやく一階まで下りてきた。外に倒れている、ひと、かげ。胸の動悸が高まる。駆け寄ると、それはやはり朋久だった。

「おい、朋久！ 大丈夫か！ 大丈夫か！」

体を揺り動かすが、まるで反応がない。人形みたいに不動のままだ。

ああ。

ああ。

もう何も見たくなかった。何も聞きたくなかった。すべての感覚情報にシャットダウンしてしまいたかった。それでも、僕の眼前にある世界は消えない。現実が消えてなくなったりしない。うしろで服部が逃げていくのが聞こえるがもうどうでもいい。

朋久は死んだ。死んでしまった。

「何、悲壮な顔してるの？」

聞きなれた声が聞こえる。朋久だった。生きている。生きている？

「お前、何で生きてるの？」

「受け身をとった」

言いながら上体を起こす。けが一つ見当たらない。

「でも、いくらお前の受け身だつて、三十階だぞ？」

「うん、俺もさすがにダメだと思った。でも、死ぬなつて思ったら秋ちゃんの顔が浮かんできてさ。そしたら今までにないくらいの最高の受け身がとれてた」

僕は嘆息した。それは安堵からだつたかもしれないし、あきれの感情からだつたかもしれない。そんなことで受け身のスキル上げてるんじゃないよ。

「源、俺つてさ、秋ちゃんのこと好きなんだな」

しみじみと彼は言った。バカじゃねえのと思う。

「そんなのみんな知ってるよ」

そうだ、そんなのは当たり前のことなのだ。彼は彼女のが好きで、彼女は彼のが好きで。本当はそれだけの、ごくごく単純な問題なのである。

「それに気づいたんなら、もうくだらんことで悩むな。ちゃんと秋と向き合え」

「努力する」

ここでそう答えるところがつくづくまじめだなと思う。

「でも、その前に服部つかまえないとな。時間がない」

「それなんだけど」

朋久は立ち上がってほこりをはらう。

「源は先に体育館戻っててくれ。つかまえるのは俺がやる」

#### 4

陽が沈み始めていた。

薄暗い道をひた走る。自分の足音だけがあたりに響く。あれからもう二時間がたっている。小川さんはどうなっただろうか。秋が人質ならめったなことはないと思うが、やはり心配はつのる。腕の振りと足の回転率を上げる。心臓が脈打ち、全身に血液を送るのがわかる。急げ、僕。

前方に学校の明かりが見えてきた。体育館のまわりに人だかりがで

きている。夕方のときより多い。野次馬だろうか。よく目を凝らすと、人ごみは二層に分かれている。体育館をぐるっと取り囲む一群と、それを遠巻きに見る少数の集まりだ。後者に近づくとちょうど同級生がいた。

「これはどうなってるんだ」

「お、田嶋。なんかヤバイことになってるんだよ」

「あそこに集まっているのは？」

「わかんない。でもやくざっぽいぜ」

たしかに体育館を取り巻いている連中はどう見ても高校生ではない。武骨な体にガラの悪い服、刺青のある者もいる。とても教育の場に入ってこれる人種とは思えない。

「おい、小娘！ さつさと服部先生を解放しろー！」

そのうちの一人が怒鳴り声を上げる。他の者もがやがやと似たようなことを言っている。彼らの目的はどうやらあのにせ服部を解放させることらしい。

なるほど、あいつらは服部の手下だ。きつとそうに違いない。数の暴力をもつてして事態を収拾させる気なのだ。さつとやつらを見回す。敵は何人だ？ 五百人はいるだろうか。数えていると、やつらの間にざわめきが起こった。輪が大きく広がる。

「お前らー！」

聞き覚えのあるハスキーボイスが響き、あたりが静まり返る。秋が

中から出てきたのだ。

「悪いけど、お前らみたいなのはお呼びじゃないんだ！ お帰り願おうか！」

挑発的な言葉にやくざ連中が色めき立つ。これだけの人数を刺激するのはあまり得策とは言えない。秋にそんな計算はできないだろうが。「もし力づくでくるっていうなら私が相手になる！」

イツツソークール。しかし、秋にだけかつこいいまねはさせられない。やくざの群れをかきわけて、輪の中心に向かう。男たちの人いきれでむんむんとする中を進む。

中心には仁王立ちの秋がいた。いつものように堂々と腕を組んでいる。僕の姿に気づくと、一瞬きよんととして、それから破顔した。

「お前はなんだ？」

やくざの一人が言う。

「あんたらに名乗る必要なんてないね」

目でやつらを煽り立てながら秋に近づき、背中合わせになる。朋久は秋の隣に立つ、僕は秋の背中に立つ、いつだってそれが僕たちの関係だ。

「よう、元気だったか？」

「源ちゃんこそ。服部は？」

「今、朋久がつかまえてるはずだ」

「ちゃんとつかまえてくるの？」

「問題なし」

さつき別れたばかりの朋久の様子を思い出す。「やる」と彼は言った。本気になったあいつには理屈なんて意味をなさない。だから、大丈夫だ。

「じゃあ、それまでに片づけちゃわないとね」

「ざつと五百人はいるけど」

「問題なし」

正面のやくざたちがこちらに向かってくる。秋が右の拳を握りしめている。

二十人が一気に吹っ飛んだ。

「バカな！」

スキンヘッドのやくざが叫ぶ。次の二十人が向かってくる。秋が左足を軸に右足を振りあげる。バン！ その二十人も無残に倒れ散る。

「そんな……屈強な男たちを一瞬で……そんなことありえない」

スキンヘッドが呆然として**ぼうぜん**している。高校生の前でこんな間抜け顔をさらして恥ずかしいんだろうか。僕はそいつの服の襟をつかむ。

「おっさん、そんなこともわからないのか？」

そのほおげたを思いつきり殴る。骨と骨がぶつかる気持ちのいい音がする。

秋を思うことで朋久は今までにない受け身をとった。

だった。

「いいか、あんたら！ この女を傷つけられるのはこの世でたった一人だけなんだよ！」

向かってくるザコを回し蹴りで一蹴する。

僕は朋久が起こした奇跡をしかと見た。  
だったら。

「そして、私は決めた！」

秋も手刀で三十人をつぶす。

誰かを思うことが人を強くするって僕は知っている。  
だったら。

「もう絶対に彼のことでは傷つかないって！」

「そう、だから！」

あごの突き出たやつがいたから膝蹴りを食らわしてやる。  
奇跡ってのはいつでも必然だと僕は知っている。  
だったら。

「今のこいつは！」

「今の私は！」

腹に刺青のあるやつが突進してくる。

朋久が奇跡を起こしたのが必然だって僕は知っている。  
だったら。

「無敵！」

そいつを二人でぶつとばす。

だったら、これだって必然だ。

自然と笑みがこぼれてきた。それはだんだんと顔中を支配して、やがて体中に広がっていく。僕の全身が笑っていた。笑い転げていた。顔が引きつるくらいに、全身が引きつるくらいに笑う。笑いながら敵を次々倒していく。

乱れ飛ぶ男たちのあわいから秋の姿が見える。いつのまにかサングラスをかけている。やくざの誰かがかけていたものだろう。彼女も笑っていた。当然だ。そりや笑うよな。ここで笑わないやつなんているかよ。

ここには僕がいる。秋がいる。もうすぐ朋久も来る。やくざたちは吹っ飛ぶ。サングラスが飛ぶ、アクセサリーが飛ぶ、ハンカチが飛ぶ、カツラが飛ぶ。その中心で僕らが舞っている。こんなに愉快なことが他にあるだろうか。

笑い疲れた僕たちは死屍累々ししるいの中にへたりこんだ。まわりで見ている同級生たちが拍手を送っている。「見せもんじゃねえよ」と言おうとしたが、声が出なかった。

暗がりの中を二つの影が歩いてくる。街灯に照らされたそのシルエットが誰のものか、僕たちはよく知っている。

「悪い、遅くなった」

そう言う朋久の横にはしょんぼりうなだれた服部がいた。さっきの威勢はどこかに霧消むしょうしてしまっている。蓬髪むしやうの乱れ具合も心なしなお

となしい。

「よくつかまえたな。どんな手使った？」

「ヒ・ミ・ツ」

いたずらっぽく笑って服部を見る。すると、彼はぶるつと怖気おぞけをふるう。

「ところでこの倒れてる人たちは？」

「知らん。ホームレスたちが野宿でもしてるんじゃないか」

とぼけて答えると、納得したようでそれ以上は聞いてこない。僕もあまりしゃべりたくないから訂正しない。

体育館の中から小川さんが出てきた。その目は焦点が合っていないくて、どこか宙を見ている。彼女の視線はいろいろなところをさまよったあと、ある一点にくぎ付けになる。すなわち、誰よりも会いたいと願っていたその人に、である。

「服部先生」

つぶやくような声だ。僕は彼女が服部と会ったとき、涙するものだと思っていた。しかし、彼女の瞳は乾いていて、その疲れ切った目で服部を見つめている。せっかく会えたというのに近づこうともしない。彼女はしばらくそうしていたあと、おもむろに頭を下げた。胴体と頭が直角の、きれいなお辞儀である。そして、「ありがとうございまして」とか細い声で言った。

服部はその様子を見てきよんとしていいる。僕らもそうだった。あ

りがとう。その一言だけでいいのか。もつと話すべきことがあるのではないのか。だが、頭を上げた彼女の表情を見て僕らは知る。一言だけで十分なのだ。あの一言を言うために彼女はずっと服部を探していたのだ。それはつまり、僕たちの戦いもこれで終わりだということの意味している。朋久と秋に目を向けてウインクする。二人ともウインクし返してくれる。

その後、清掃員のおばさんが転がった五百人をきれいに片づけてくれた。野次馬のように見ていた同級生や小川さんも帰っていき、僕らは三人だけになる。

朋久がもじもじもじしているのので背中を押す。

「おい、秋に言いたいことがあるんだろ」

「うん」

「じゃあ、さつさと言え」

僕に押されてバランスを崩した朋久はあやうく秋にぶつかりそうになる。それを秋が支えて、二人は見つめあうかつこうになった。

「あの、秋ちゃん」

「何？」

「俺、気づいたことがある。俺、秋ちゃんのことを好きなんだ」

「知ってるよ、そんなの」

「俺も知ってるつもりだった。自分が秋ちゃんを好きだって。でも違ったんだ。秋ちゃんのこと大好きだと思ってた。秋ちゃんのこと考え



ると心臓が止まるくらい好きだと思ってた。秋ちゃんのことしか見えないくらい好きだと思ってた。秋ちゃんのためなら何でもできるくらい好きだと思ってた。秋ちゃんのためなら死んでもいいくらい好きだと思ってた。秋ちゃんのためなら地獄の果てだって行けるくらい好きだと思ってた。でも、」

彼は自分の胸をがっしりとつかむ。

「こんなに」

胸をつかむ腕にいつそう力が入る。まるでそこにある何かをたしかめるように。

「こんなに好きだなんて思ってもみなかったんだ。本当にさっき気づいたんだ。俺、こんなに、こんなに秋ちゃんのこと好きなんだって」  
野暮なツツコミをしようかと思つたがやめる。彼が言っているのはたぶん今ここにある、その胸のあたりに漂っている気持ちのことなのだ。

「私も好き」

うれしそうな顔で秋が言う。

「言葉じゃ伝えきれないくらい岡崎くんのが好き。伝えきれないくらいっていうか、伝えきれない。だって百人で叫んでも全然足りないだもん。一生かかっても無理かもね」

それは彼女の憂いだっただけである。でも、今の彼女の表情はとも晴れやかだ。

「でも、その一生かかっても伝えきれない気持ちを、神様は私たちにくれたんだよ。毎日毎日少しずつ伝えていけるように。毎日毎日ずっと一緒にいられるように。運命ってそういうことだと思っただ」

秋がそう言つて微笑むと、朋久が微笑み返す。手をつなぐでもない、抱き合うでもない。ただ笑い合う。そんな一瞬が彼らをつないでいる。世界で一番幸せな瞬間だよなと思つて、お前は世界中の幸せを見て回つたのかつて自分にツツコンで、やつぱ「世界」って概念は狭いなあつて考えて、でもその狭さが愛すべきもののように思えて、だから僕はもう一度思う。

これが世界で一番幸せな瞬間だ。

## 5

翌日、寝床でぬくぬくしていると、母が乱暴にかけぶとんをはぎとつた。

「いつまで寝てんの？」

「今日は一日」

きのうの乱闘のせいで全身筋肉痛だ。打撲や擦り傷も一つや二つではない。客観的に見て今の田嶋源に必要なのは十分な休息である。健全な男子高校生たる僕にとって、じっとしているのは苦痛以外の何物でもないが、致し方……ッ！ 突然、足に鋭い痛みが走る。見れば、母がのすねを蹴っている。痛い。

「いつてえよ！」

「学校行きなさい。誰があなたの授業料を払っているのかちゃんと認識していらつしやるのかしら」

なぜ肉親に対してこども冷酷な瞳を向けられるのか。

「学校？ 休みだよ」

小川さんが体育館に立てこもったとき、まつさきに期待したことがあった。

これは明日の学校、休みになるんじゃないか？

だってこんな重大な事件が起こったのだ。現場検証とか生徒の心情に配慮してとかそういう理由で翌日の授業は休みになるかもしれない。いや、なるに違いない。そうでなければ誰が五百人のやくざ相手に大立ち回りなんて演じるものか。今日の休みが確約されているからこそ、きのうの僕はがんばれたのだ。

「でも、そんな連絡来てないよ」

「んなバカな」

起き上がって学校に電話してみる。事務員の声が聞こえてくる。

「あの、今日って学校休みですよね？」

『いえ、通常通りありますが』

信じられない答えが返ってくる。

「でも、きのうあんな事件があったんですよ？」

『事件？ 何のことですか？』

「とぼけないでください。体育館の立てこもりです」

『私にはわかりかねます』

背筋を悪寒が走る。まさか。まさか、学校はあの事件を隠ぺいするつもりなのか。五百人もの負傷者が出ているというのに。そんなことが許されているのだろうか。

『とにかく授業はありますので、いつも通り登校してください。あなたの来校を心よりお待ちしております』

一方的に通話は切られてしまった。僕の表情を見て察したのだろうか、母が勝利の笑みを浮かべている。

痛みをおして学校に行くと、いつも通りの教室があった。予習や宿題をしているやつら、おしゃべりに興じているやつら、ゲームで盛り上がっているやつら。どこを切りとつてもごく平凡な日常の風景だ。聞き耳を立ててみても、きのうの事件について話題にしている人間は一人もいない。

僕は悟った。学校は事件を隠ぺいしようとしているのではない。みんな事件のことをよく覚えていないのだ。事件の中心には服部がいた影の薄さでは人後に落ちることのないあの服部である。ならば、彼が関係する事件だって影が薄くなるのは自明のことではないか。

やがてチャイムが鳴り、担任が教室に入ってくる。名簿を開いて朝の出欠を確認する。病気がちの山本が休んでいる以外はみんないる。いつも通りの一日が始まる。この筋肉痛も影が薄くならないだろうか、

と思う。

それからは特筆することもなかった。誰も服部について語らなかつたし、思い出しもしなかった。事件に積極的にかかわった僕たちでさえ例外ではなかったが、ただ一度だけ、秋とこんな会話をした。

「そういえば服部ってどうなったんだろうな？」

「服部？」

秋はエスぺラント語でも聞いたかのような顔をする。

「ほら、日本史教師の」

「ああ、服部ね」

「もしかして忘れてた？」

「まっさか」

ブルドッグみたいに首を振る。完全に忘却の彼方だったようだ。

「今、日本史は誰が教えてるんだ？ 本人？ それともあー？」

「さあ、私は地理だし」

普通に考えたら、あんな事件の後に本物にもせものも働けないだろう。しかし、教員に欠員が出て困ったという話は寡聞<sup>かぶん</sup>にして知らない。いくら影が薄いといっても、教師が一人減れば何らかの不都合があるはずだ。では、代わりの人員が補充されたのか。でも、新しい教師が赴任したという情報もない。

「きっとどうにかなってるんじゃない」

秋が投げやりに言う。

「まあ、どうにかなってるんだろうな」

僕もそこまで気になっているわけではない。たぶん小川さんに聞けばわかるのだろうが、する気もない。きつと僕じゃなく誰も気にしていない、気に留めない。それでこそその服部教諭だ。

「ところでさ、秋」

「何？」

「二人で一緒にいるのやめたほうがいいんじゃないか？」

「どうして？」

「ほら、朋久が嫉妬するだろ」

「だってやましいことないじゃん」

それは秋の言うとおりだ。しかし、これはそういう問題ではない。

「それとも源ちゃん、私のことそういう風に思ってるの？」

「これだけ長く付き合ってきて、一度もそういうの考えたことないなんて都合のいいことは言わないさ」

「私はないけど」

それでは僕がいやらしいやつみたいじゃないか。

「でも、相手の好意に甘えてばかりじゃダメだろ」

「それもそうなんだけどね。でも、今のままでいい。だって」

そう言つて秋はいたずらっぽく笑う。

「岡崎くんが嫉妬してくれるの、けっこううれしいし」

ぶん殴りたいくらいかわいらしい笑顔だな、と思った。

最後に一つの疑問を解消しておこう。

服部教諭がなぜ小川さんにあれほど慕われていたのかってことである。服部は影の薄い日本史教師でしかなかった。それなのになぜ？というのには僕ら共通の疑問だった。その疑問はあるエピソードを開示することで氷解する。服部と小川さんの、とある放課後の物語だ。もちろんその場に僕は居合わせていなかったから、本来なら語り手たりえない。しかし、もう最後だし、ちよつとのズルはご容赦願おう。今から僕は全能の語り手、見えない語り手、世界外存在としての語り手だ。

その日、小川さんは教室の隅で一人物思いに沈んでいた。クラスメイトから告白されたのだ。正直に言つて全然タイプじゃないし、付き合う気もない。しかし、どう断ればいいのか。こういう状況に陥ったことがないので皆目見当もつかない。窓から見える夕焼けがきれいで、でもそれに感動するような余裕を持たない自分が恨めしかった。

そこにタイミングよく、というか間が悪くというか、件の服部教諭が入ってきた。最初、小川さんにはそれが誰だかわからない。うつすら見たことがあるような……何の先生だっけ？ どうしても誰か思い出せない。自分と何の接点もない他人と同じだ。だからこそ彼女は自分の悩みを漏らしてみる気になったのかもしれない。

「先生、告白つてどう断つたらいいですかね？」

小川さんの言葉に服部はひどく驚いて——影の薄い自分が話しかけられるなんて思つていなかったのだ——戸惑いながら言った。

「ん？ 告白されたの？」

「まあ、はい」

「そんなの『ごめんなさい。付き合えません』でいいでしょう」

「その、どうやったら相手をなるべく傷つけないように断れるかなって」

「無理でしょ」

服部は小川さんの要望をバツサリと切り捨てる。

「きみに告白したそいつの望みわかる？」

小川さんは答えられない。

「きみを自分のものにするんだ。きつとそいつはきみが笑顔でいてくれたらとか抜かすけどそんなのうそうそ。世界で一人しかないきみを自分の所有物にしたい、それだけだよ。その気持ちに応える気がない以上、きみはそいつを傷つけるしかない」

「でも、そんなの嫌です」

人を傷つけるなんて気分が悪い、と小川さんは思う。あつちが勝手に私のことを好きになって、勝手に告白してきただけじゃないか。それでなぜ私が気分を害さなきゃいけないのだろう。

「嫌だね。理不尽だよなあ。理不尽だよ。告白されたことにきみは何

の責任もない。でも、告白されちゃった以上、きみは何も悪くないのに嫌な思いをしなきゃいけない。人を傷つけなきゃいけない。そりや理不尽だよなあ。でも、受け入れるしかないよね」

「じゃあ、私はどうすればいいんですか？」

「きみがそいつを傷つけるのは決定事項。だからちゃんと傷つける。中途半端な優しさなんて見せるな」

「ちゃんと傷つける……」

それは小川さんにしてみれば思いもよらない解答だった。でも、それは不思議と心の中にすっと入ってきた。ちゃんと傷つける。ちゃんと傷つける。

小川さんが押し黙ってしまったのを見て、服部は教室を出る。柄にもなくしゃべってしまった、と思う。よくあんな口から出まかせを言えたものだ。でも、明日になれば彼女は自分の顔も自分の言葉も忘れていただろう。自分は影の薄い男だから。

そんな予測とは裏腹に小川さんは服部の顔をはつきりと覚えていた。その言葉も忘れずに大切にしている。

だからその日は、小川さんが初めて自覚的に誰かを傷つけた日だった。  
カーテン・フオール  
た。終幕。